

ヒートリーさん

祇園カズコ

この夏、新聞でヒートリーさんの訃報を見た。「B・ヒートリーさん」とあっても、はじめ分からなかったが、小見出しに「東京五輪マラソン『銀』、円谷さんと激闘」とあるから、すぐにピンときた。知らないどころではない、忘れられない人である。

前回東京でオリンピックが行われた55年前、私は10歳、小学校4年生だった。

あの日、2限続きの図工の時間に、テレビでオリンピックのマラソンを見たいとおねだりする子がいて、担任の木村先生はちよつと考えられた後、「いいでしょう」と、教室のテレビのスイッチを入れてくれた。

私たちは机を四つ向き合わせてかたまり、何か図工をしながら(何をしたのかは記憶にない)目はテレビにくぎづけだった。

エチオピアのアベベや日本の円谷選手など、数人が集団から抜け出て、他を引き離して走る。アベベは軽々と先頭を走る。黒い肌と黒くて短い髪がくるくると頭に巻きついていていた。

円谷は2位につけて走るが少しずつ差は開いていく。しかし作戦だと思う。力をためておいてきつとどこかで抜くと思っていた。最後の最後には抜いて1位になると信じて疑わない。行け！ 円谷。

しかし、ついに逆転することはかなわず、アベベが1位でテープを切った。

では銀だ。競技場まで帰っているのだからもはや銀は確実と思っていたら、後ろから降って沸いたように現れ、ぐいぐいとせまって

くる選手がいる。振り切れ円谷、がんばれ円谷と声援を送るが、ゴール寸前で追いつかれ追い越された。ぽかんとするほどあつけなくだった。

あの選手がイギリスのベイジル・ヒートリーさんだったのだ。白黒テレビで見るから白い髪に見えた金髪は乱れて、苦しげにゆがんだ顔にかかっていた。

三者三様の肌の色、髪、表情。よくぞあの時、木村先生はテレビを見せてくれたと思う。おかげで、あの世紀のマラソンをタイムリーに見たのだ。

この東京五輪マラソンで銅メダリストとなった円谷幸吉選手は、戦後の日本陸上に初めてメダルをもたらしたにも関わらず、数年後に自ら命を絶った。金を期待される重圧に押しつぶされたと報道された。あの日彼の走る姿を見、声援をしたから、とても驚き悲しかった。

金メダリストのアベベも、交通事故で車椅子生活を余儀なくされ、41歳で亡くなっている。輝かしい栄光の後で三人の内二人までが、その後順調ではなかったのだ。

しかし、ここでヒートリーさんが85歳まで人生を全うしたことを知った。小さな記事の中に、妻や親戚と休暇を過ごす晩年がうかがえて、なにかしらほっとしている。

※ベイジル・ヒートリーさんは8月3日、イギリス内の親族宅で死去。

作者 祇園カズコ

題名 ヒートリーさん

山陽新聞夕刊

2019.11.07 掲載